

# 音声学・音韻論の研究

山田 英二

本分野では、主たる論考・著作が国内外で 116 篇(冊)見出された。

このうち国内の学会誌や紀要における論文は 39 篇であった。前回より 10 篇増となり、心強く思う。今年度分(2017.4-2018.3)として全国 1581 冊の文系学会誌・紀要を渉猟したが、遺漏があった場合はお知らせ頂ければ幸いである。

実は例年に比べ総数が少ないと感じ、確認したところ、500 冊ほど現物を手に取って見るができなくなっていた。オンラインを謳う紀要類はネットで検索できるものの、億劫なのは当該大学の「機関リポジトリ」とやらに入り、その画面上で煩瑣な操作を逐一要求されることである。

四半世紀前、北欧で Linux が登場したという情報を入手した筆者は直ぐに自前のサーバを立ち上げた。首尾単独作業であったので、以来ネットワークのことは多少わかると自負していたが、この一年で論文のオンライン化が急増した事実に驚いている。「機関リポジトリ」に載っているはずなのにアクセスできないものが 50 冊ほどあった。論文執筆の際は、ネット掲載に関しては閲覧できるかどうかの最終チェックを怠らないようにして頂きたい。

今回は、以下の気鋭 39 篇を紹介する。

1. Atsunori KAMIYA, “Rhythmic Foot Structures in Adjectives of English” (岩手県立大学宮古短期大学部『岩手県立大学宮古短期大学部研究紀要』第 28 号)——英語は、強勢音節が時間的に等間隔に出現する傾向があり、等時性と呼ばれている。本論文では、その等時性がどのように現れるかについて、二音節形容詞の二種類の比較級 (xx-er, more xx) を文中での好ましさを基準にして被験者に選ばせる実験を行い、等時性が英語のフット (foot) の存在に関わっていることを示唆した。例文の選択にやや工夫が必要なものもあるが、論旨明瞭な論文である。

2. 神谷厚徳, 「基本フットの解明と英語の音声変化に関する実証研究」(開拓社『現代言語理論の最前線』2017)——上記 1 の論文におけるフットの長さを実験で測定し、基本フットの長さは 400 ms.~500 ms. となると主張する。発話時間がこの閾値を超える場合には、母音の弱化・脱落・同化・連結などの音声変化が生じるという。音韻的概念のフットを音響・音声的な視点から捉える興味深い試みといえる。

3. 近藤眞理子, 「日本語話者の英語流音の認識」(上掲 2 と同一書誌)——日本語には音素としての /l/ と /r/ の対立がないため、日本語母語話者にはこれらの二つの音の聞き分けや、発話は難しいとされている。本論文は、第二言語 (L2) として英語を学

ぶ日本語母語話者が、これらの音を L2 の「新しい範疇の音」として認識しているのかを、産出という観点から考察したものである。(i) アメリカ英語の発話をできるだけ忠実に真似る、(ii) 日本語を、日本語があまり流暢でないアメリカ人の真似をして発話する、というような面白い産出実験を用い、L2 の音体系に迫っている。L2 として英語を学ぶ日本語母語話者はアメリカ英語の /r/ 音に関しては、新しい範疇の音としての認識ができていないのではないかと結論づける、実験と考察のバランスが取れた好論文である。

4. 江口小夜子、「英語音声のストレス知覚における母音音質の影響——英語母語話者と日本語母語話者の比較」(日本音声学会『音声研究』第 21 巻第 2 号)——英語母語話者と日本語母語話者が英語の強勢位置を知覚する際の母音の影響を調べるため、合成音声を用いて聴取実験を行い、英語話者は母音音質(弱母音、強母音など)と超分節素性(高さ、長さ、強さ)の両方を使っているが、日本語話者は主に超分節素性を手ごかりとして強勢位置を知覚していることを示した。説得力ある論文である。

5. 大川英明、「明治維新時のピジン横浜方言——母音音声転写分析」(日本大学国際関係学部『国際関係研究』第 38 巻第 1 号)——Hoffman Atkinson が明治 12 年(1879 年)に出版した *Exercises in the Yokohama Dialect* という小冊子内の母音音声に焦点を絞り、当時の日本語横浜方言の英語への転写を体系的に分析したもの。例えば、日本語の「難しい」は「moods cashey」と転写されているが、これは日本語が母語でない人が当時の横浜方言をどのように聞き取ったかというだけではなく、リスナー側の音韻体系と日本語母語話者のそれとの対比が可能となる点でも興味深い。日英語の音韻体系に対する関係が上掲 3 と逆転している。

6. 大川英明、「明治維新時のピジン横浜方言——子音音声転写分析」(日本大学国際関係学部『国際関係研究』第 38 巻第 2 号)——上記 5 の子音編。

以下、主要論文名と書誌のみ掲載する。7. MATSUURA Hiroko, “Listening to Unfamiliar English Accents: Japanese EFL Learners’ Perceptions and Comprehension” (福島大学経済学会『商學論集』第 86 巻第 1 号) 8. Rieko Nagamasa, “Japanese Students’ Pitch Patterns in Relation to English Sentence Stresses” (鹿児島純真女子短期大学『鹿児島純真女子短期大学研究紀要』第 48 号) 9. 島袋盛世, 「英語の音韻体系とカタカナ表記について」(琉球大学法文学部国際言語文化学科(欧米系)『言語文化研究紀要 SCRIPSIMUS』第 24 号) 10. 川崎貴子・田中邦佳, 「選択的注意の誘導による L2 音の知覚への影響——日本語母語話者による英語の liquid と fricative の知覚」(法政大学英文学会『英文學誌』第 60 号) 11. Tomomasa Sasa, “Glottalization in English Homorganic Glide-Vowel Sequences by Japanese L2 English Learners” (日本音韻論学会『音韻研究』第 21 号) 12. Kikuyo Ito, “Perception of English Word-final Stops in Clearly Articulated Connected Speech by Japanese L2 Learners of

- English” (日本音韻論学会『音韻研究』第21号) 13. OGURA Michiko, “Compound Reflexive as a Metrical Filler, or *Self* in *Himself* used as an Alliterating Element?” (English Literary Society of Japan, *Studies in English Literature*, English Number 58) 14. 藤原保明, 「英語の /r/ の消失について」 (聖徳大学大学院言語文化学会『言語文化研究』第16号) 15. Michiko WATANABE and Yusaku KOREMATSU, “Factors Affecting Clause-Initial Filler Probability in an English Monologue Corpus” (日本音声学会『音声研究』第21巻第3号) 16. Ralph L. ROSE, “A Comparison of Form and Temporal Characteristics of Filled Pauses in L1 Japanese and L2 English” (日本音声学会『音声研究』第21巻第3号) 17. B. Elan Dresher, “Contrastive Feature Hierarchies in Synchronic and Diachronic Phonology” (日本音韻論学会『音韻研究』第21号) 18. Hinako Masuda, “Effect of L1 Influence and L2 Proficiency on the Perception and Production of Foreign Sounds” (日本音韻論学会『音韻研究』第21号) 19. 松沢絵里, 「r音について」 (上掲2と同一書誌) 20. 北原真冬, 「音声・音韻研究における音声コーパスの利用」 (上掲2と同一書誌) 21. 平郡秀信, 「ME /u:/ と ME /ou/ の融合について」 (中京大学国際教養学部『国際教養学部論叢』第9巻第1号) 22. Hideo KOBAYASHI and Peter M. SKAER, “Epenthesis Positioning and Syllable Contact in English and French” (広島大学大学院総合科学研究科『広島大学大学院総合科学研究科紀要. I, 人間科学研究』12巻) 23. 青木理香, 「中日バイリンガルによる英語語頭破裂音の生成」 (埼玉大学『埼玉大学紀要(教養学部)』第53巻第1号) 24. Mikako Imamura, “Reading Aloud in English” (東京女子大学言語文化研究会『東京女子大学言語文化研究』26) 25. 井上典子, 「14世紀頭韻詩韻律研究の現況と展望」 (小樽商科大学言語センター『言語センター広報 *Language Studies*』第26号) 26. 島袋盛世, 「アメリカ英語の母音体系について」 (琉球大学法文学部国際言語文化学科(欧米系)『琉球大学欧米文化論集』第62号) 27. Nanae Yamada, “Notes on the Accented Operator as an Emphatic Device” (津田塾大学『言語文化研究所報』第32号) 28. Ryuichi HOTTA, “*Telling a Lie* vs *Lying*: Exaptation of the Spelling <y> in the History of English” (慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』No. 113-2) 29. 熊田和典, 「17世紀の音声学者の [j], [ɜ], [tj], [dʒ] の分類と記述」 (埼玉学園大学『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』第17号) 30. 田邊祐司, 「日本英語音声教育史: P. A. Smith の *Notes on Practical Phonetics* について」 (専修大学学会『専修人文論集』102号) 31. 横谷輝男, 「<e, i> が引き起こす硬口蓋歯茎化のための発音規則」 (青山学院大学文学部『青山学院大学文学部「紀要」』第59号) 32. 横山輝男, 「弱母音の <u> のための発音法則」 (青山学院大学英文学会『英文學思潮』Vol. XC) 33. 竹田道代, 「語源的綴字への変化——debt, fault, throne について」 (鶴見大学大学院『鶴見英語英米学研究』第19号) 34. 出世直衛, 「英語の音声学習と指導」 (國學院大学『國學院雑誌』第

118 巻第 6 号) 35. 桃生朋子・川原繁人, 「マイボイスと大学言語学教育」(慶應義塾大学『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 49 号) 36. 秋吉康晴, 「声の機械化——オルタナティブな音響再生産の理論と実践」(京都精華大学『京都精華大学紀要』第 49 号) 37. Stew Markel, “Approaching Pronunciation in a Japanese University Classroom”(関西学院大学『総合政策研究』第 54 号) 38. クロード・ロベルジュ, 寺尾いづみ, 「話しことばへの最適な道としての身体」(上智大学国際言語情報研究所, *Sophia Linguistica*, 第 66 号) 39. Eiji Yamada, “Plato’s Problem and Recursiveness in English Word Stress Theory: The Case of *SPE*”(開拓社『ことばを編む』2018) 単行本は下記 2 冊が目についた。

1. 川原繁人, 『「あ」は「い」より大きい!?!——音象徴で学ぶ音声学入門』2017. ひつじ書房。——音象徴をキーワードとして, 楽しくかつ興味深く音声学を学べるように工夫された好書である。2. 北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳, 『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』2017. ひつじ書房。——音声学・音韻論の研究に今やなくてはならない音声・音響分析ソフトとなった Praat への鶴首された導入書である。これにより音声学・音韻論の研究を目指す若者が増えることを期待する。

国外では, *Phonology* (5 篇を含む (以下, 数字のみ)), *Phonetica* (4), *Natural Language and Linguistic Theory* (2), *Linguistics* (4), *Linguistic Inquiry* (2), *Lingua* (3), *Language and Speech* (11), *Language* (1), *Journal of Phonetics* (14), *English Language and Linguistics* (2), *Journal of Linguistics* (1) の各誌各号のうち, 英語に関わる音声学・音韻論の論文は計 49 篇, 単行本は昨年同様 26 冊が上梓されている。紙幅により詳細については HP ([https://eym.sakura.ne.jp/public\\_html/en/2019/en2019.html](https://eym.sakura.ne.jp/public_html/en/2019/en2019.html)) を参照されたい。

(福岡大学教授)